

■ 概況

3/17~3/23のNYMEX・WTI先物市場は、102.98~114.93ドルの範囲で推移した。

3月24日は、前日の大幅上昇を受けた利益確定売り、同日の主要7か国首脳会議(G7)・EU首脳会議での対口追加制裁の見送り、米エネルギー長官の追加備蓄放出の検討発言などを受けて、反落した。5月限の終値は前日比2.59ドル安の112.34ドル。

週末25日は、ウクライナ経由のパイプラインの一部復旧報道で、売り優勢ではじまったが、サウジの石油施設が20日に続きイエメンの親イラン武装組織フーシ派のロケット攻撃を受けたとの報道で反発した。また、ペカーヒューズ社発表の米国内稼働石油掘削装置は前週比7基増の531基で2週ぶりの増加。5月限の終値は前日比1.56ドル高の113.90ドル。

週明け28日は、中国上海におけるコロナウイルス感染症の再拡大で、上海の東半分が事実上の都市封鎖となり、経済活動の停滞が懸念されることから、大幅に反落した。29日からトルコで再開されるロシアとウクライナの停戦協議も、停戦期待の拡大から、値下がり要因となった。5月限の終値は前営業日比7.94ドル安の105.96ドル。

29日は、ロシアがウクライナの戦線縮小を表明、両国の停戦協議も進展が見られたことで、停戦期待が膨らむとともに、上海でのコロナの感染再拡大で、中国の需要が停滞するとの懸念から、続落した。また、OPECプラスの閣僚会議を前に様子見ムードも強かった。5月限の終値は前日比1.72ドル安の104.24ドル。

30日は、ロシアに戦線縮小の動きがみられないこと、ドイツの経済相がガスの安定供給に関し早期警戒の必要性を表明

し、改めて、ロシアからのエネルギー供給のひっ迫感が意識されたことで、3営業日ぶりに反発した。また、米国原油在庫は市場予想を上回る取り崩しが報告されたことも、上昇要因となった。5月限の終値は、前日比3.58ドル高の107.82ドル。

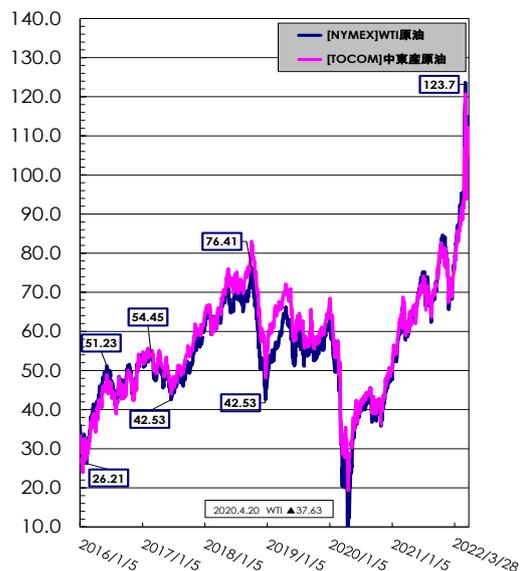
アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(5月渡し)は、3月17日~23日の間、98.80~116.60ドルの範囲で推移した。3月24日115.50ドル、25日114.50ドル、28日112.60ドル、29日106.40ドル、30日107.90ドルで推移した。

為替は、3月17日~23日の間、118.69~121.16円の範囲で推移した。3月24日121.07円、25日122.07円、28日122.24円、29日124.22円、30日122.48円で推移した。

そのような中で、3月28日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.6円の値下がり、軽油は同0.6円の値下がり、灯油は7円の値下がり(18%ベース)であった。ガソリンは2週ぶりの値下がり、軽油も2週連続の値下がり、灯油も2週連続の値下がりとなった。ガソリンの全国平均価格は174.0円と、引き続き、燃料油価格激変緩和対策が発動され、補助金の支給額は上限の25.0円。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	3/20 ~ 3/26	2,927 ▼ -98	▲ -
	トッパー稼働率 (%)	"	76.1 ▼ -2.5	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	3/26	9,648 ▼ -73	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	3/28	105.62 ▼ -6.71	▲ 44.5
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	3/28	105.96 ▼ -6.16	▲ 44.4
	原油CIF単価 (\$/bbl)	3月上旬	89.93 ▲ 2.08	▲ 28.28
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	65,172 ▲ 1,407	▲ 23,647
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	115.22 ▲ 0.18	▼ -8.14
	外国為替TTSレート (¥/\$)	3/28	123.24 ▼ -2.20	▼ -12.61

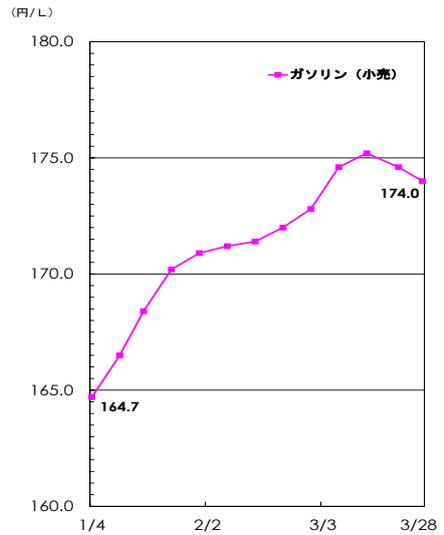
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/20 ~ 3/26	775 ▼ -140	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	836 ▲ 78	▼ -	
	輸出	"	128 ▲ 31	▼ -	
	在庫	3/26	1,516 ▼ -190	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/22 ~ 3/28	78.4 ▲ 0.1	▲ 18.4	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/22 ~ 3/28	82.4 ▲ 2.4	▲ 27.8
		(TOCOM/中部)	3/28	81.7 ▼ -0.3	▲ 24.8
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/28	174.0 ▼ -0.6	▲ 23.7	

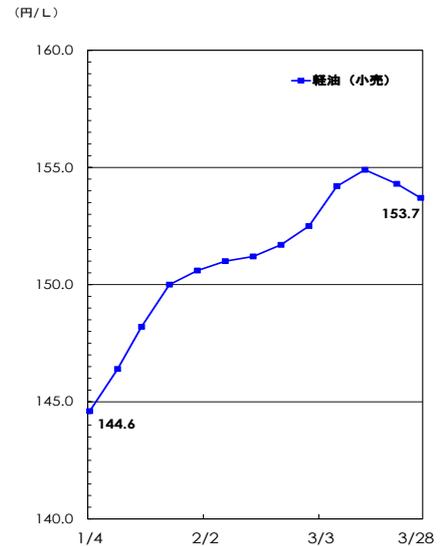
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

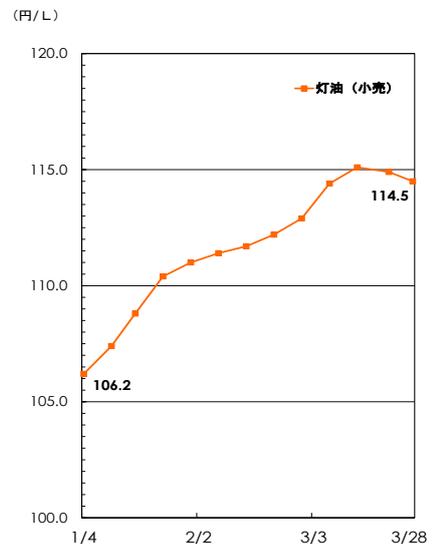
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/20 ~ 3/26	723 ▲ 6	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	611 ▼ -36	▲ -	
	輸出	"	83 ▼ -2	▲ -	
	在庫	3/26	1,259 ▲ 29	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/22 ~ 3/28	79.1 ▼ -1.4	▲ 16.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/22 ~ 3/28	91.1 ▼ -0.5	▲ 31.1
		(TOCOM/中部)	3/28	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/28	153.7 ▼ -0.6	▲ 23.3	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	3/20 ~ 3/26	267 ▼ -32	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	315 ▲ 63	▲ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	▲ -	
	在庫	3/26	1,113 ▼ -48	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	3/22 ~ 3/28	78.4 ▼ -1.3	▲ 17.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	3/22 ~ 3/28	80.8 ▼ -0.7	▲ 25.2
		(TOCOM/中部)	3/28	81.0 ➡ 0.0	▲ 24.3
	小売 [週動向] (資工庁公表)	3/28	114.5 ▼ -0.4	▲ 23.2	



■ 関連情報

1 海外/原油

3月30日のNYMEX先物原油は、ロシアのウクライナ戦線縮小の発表にかかわらず、その動きがみられないことで、紛争長期化懸念が高まり、3営業日ぶりに反発した。欧米諸国からは経済制裁強化の動きも出ている。さらに、ドイツのハベック経済相は、天然ガス安定供給について「早期警報」を発表し、国民に呼びかけた。また、同日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の先週末時点の米国の石油在庫週報が、原油在庫が340万バレル減と市場予想を上回る取り崩しで、2018年9月以来の低水準となったことも、値上がり要因となった。5月限の終値は前日比3.58ドル高の107.82ドル、6月限は3.63ドル高の105.68ドルだった。

EIAによると、3月28日時点のガソリンの小売価格は、前週

比0.8セント値下がりの1ガロン4.231ドル(137.6円/ℓ)、ディーゼルは同5.1セント値上がりの5.185ドル(168.6円/ℓ)となった。ガソリンは2週連続の値下がり、ディーゼルは2週ぶりの値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2022年3月20日～3月26日に休止したトッパー能力は43.1万バレル/日で、前週に対して14.2万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は292.7万klと、前週に比べ9.8万kl減少。前年に対しては12.0万klの増加。トッパー稼働率は76.1%と前週に対して2.5ポイントの減少、前年に対しては3.2ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてガソリン、灯油が減産、その他の油種で増産となった。ガソリン/15.3%減、ジェット/1.3%増、灯油/10.6%減、軽油/0.9%増、A重油/10.1%増、C重油/2.3%増。今週のC重油の輸入は5.4万kl(前週比5.4万kl増)。軽油の輸出は8.3万kl(前週比0.2万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でガソリン、灯油が増加し、その他の油種で減少した。前年比では灯油、軽油、C重油が増加し、その他の油種で減少した。ガソリンの出荷は83.6万kl(対前週10.4%増)と2週連続で増加した。ジェット5.8万kl(対前週2.4%減)、灯油31.5万kl(対前週25.2%増)、軽油

61.1万kl(対前週5.5%減)、A重油20.2万kl(対前週6.2%減)、C重油16.4万kl(対前週1.0%減)。

(単位：千KL)

	今週 (3/20 ~ 3/26)	前週 (3/13 ~ 3/19)	前週比	
ガソリン	836	758	▲ 78	(10%)
ジェット燃料	58	59	▼ -1	(-2%)
灯油	315	252	▲ 63	(25%)
軽油	611	647	▼ -36	(-6%)
A重油	202	216	▼ -14	(-6%)
C重油	164	165	▼ -1	(-1%)
合計	2,186	2,097	▲ 89	(4%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

3月26日時点の在庫は、ガソリン、灯油、C重油が取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。前年に対しては全ての油種で減少となった。

ガソリンは151.6万kl、前週差19.0万kl減。前年に対しては28.9万kl少ない。

灯油は111.3万kl、前週差4.8万kl減。前年に対しては40.8万kl少ない。

軽油は125.9万kl、前週差2.9万kl増。前年に対しては15.4万kl少ない。

A重油は66.9万kl、前週差0.0万kl増。前年に対しては2.8万kl少ない。

C重油は151.7万kl、前週差4.1万kl減。前年に対しては27.0万kl少ない。

(単位：千KL)

	今週 (3/26)	前週 (3/19)	前週比	
ガソリン	1,516	1,706	▼ -190	(-11%)
ジェット燃料	746	724	▲ 22	(3%)
灯油	1,113	1,161	▼ -48	(-4%)
軽油	1,259	1,230	▲ 29	(2%)
A重油	669	669	▶ 0	(0%)
C重油	1,517	1,558	▼ -41	(-3%)
合計	6,820	7,048	▼ -228	(-3.2%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

3月22日～28日の指標原油価格は前週比で大きく値上がりし、為替レートは円安で、元売会社の原油コストは、9.0円値上がりしたものと見られる。

上記コストアップに加え、前週の補助金額18.6円を加えたコスト上昇額27.6円に、補助金上限額の25.0円が支給されることから、次週(3/31～4/6)の元売り会社の実質的な卸価格は

は2.6円の値上げとなった模様。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

3月22日～28日の製品スポット市況は、3月15日～21日平均と比べ、先物ガソリンの大幅な値上がり、陸上ガソリン、海上灯油のわずかな値上がりを除いて、他の油種・取引で値下がりました。

直近週(3/22～3/28)の陸上スポット価格平均値は、前週(3/15～3/21)比で、ガソリンは0.1円の値上がり、灯油は1.3円の値下がり、軽油は1.4円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(3/22～3/28)に、前週(3/15～3/21)比で、ガソリンは0.5円の値下がり、灯油は0.1円の値上がり、軽油は1.5円の値下がりだった。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは2.4円の値上がり、灯油は0.7円の値下がり、軽油は0.5円の値下がりだった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (3/22～3/28)	前週 (3/15～3/21)	前週比
	レギュラー	78.4	78.3
灯油	78.4	79.7	▼ -1.3
軽油	79.1	80.5	▼ -1.4

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (3/22～3/28)	前週 (3/15～3/21)	前週比
	レギュラー	82.4	80.0
灯油	80.8	81.5	▼ -0.7
軽油	91.1	91.6	▼ -0.5

※上記価格は税抜き価格

参考値 (3/22～3/28実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 0.1	▲ 2.4	▲ 1.2
灯油	▼ -1.3	▼ -0.7	▼ -1.0
軽油	▼ -1.4	▼ -0.5	▼ -1.0
A重油	▼ -1.7		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

3月28日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.6円安の174.0円、軽油は同0.6円安の153.7円、灯油は18%ベースで7円安の2,061円(1%ベースでは同0.4円安の114.5円)。ガソリンは2週連続の値下がり、軽油も2週連続の値下がり、灯油も2週連続の値下がり。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは4県、横ばいは4県、値下がり39都道府県だった。全国最安値は愛知県の168.7円、その次は岩手県の168.8円であった。他方、最高値は長崎県の182.9円だった。最も値上がりしたのは長崎県(前週比1.0円高)で、横ばいは石川県など4県、最も値下がりしたのは沖縄県(前週比2.7円安)だった。

次回調査時(4/4)のガソリンの小売価格は、補助金限度額を上回る原油価格の値上がりで、値上がり予想される。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (3/28)	前週 (3/22)	前週比	直近高値
レギュラー	174.0	174.6	▼ -0.6	08/8/4 185.1
灯油	114.5	114.9	▼ -0.4	08/8/11 132.1
軽油	153.7	154.3	▼ -0.6	08/8/4 167.4

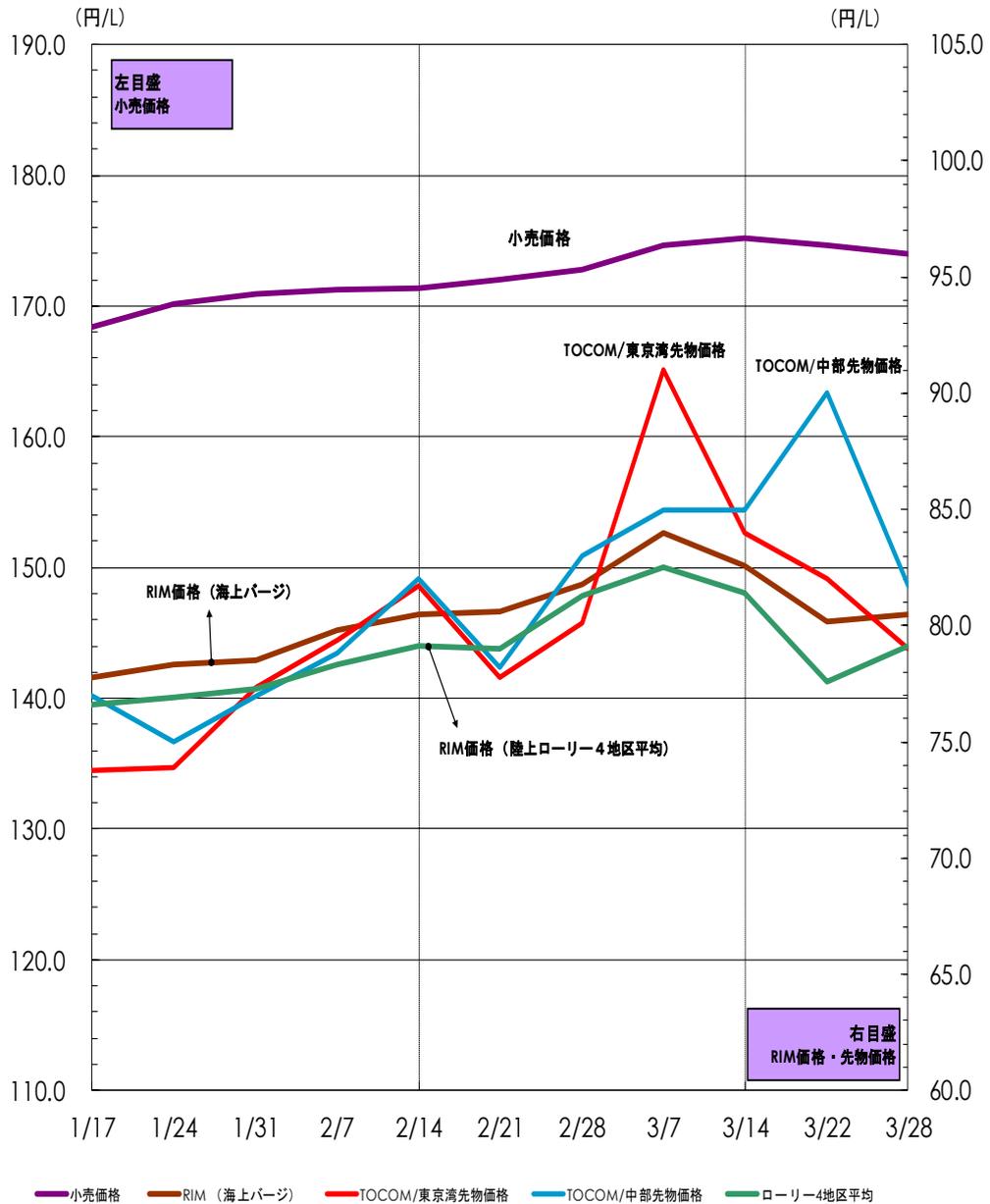
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2022/1/17 ~ 2022/3/28)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2022第2号)の公表は、4/8(金) 14:00 です。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。